

ヒレジャコのケージ養殖技術

〔要約〕従来の仕切型ケージによるヒレジャコ養殖では小型種苗の養殖が困難で、中型サイズについても養殖密度が低かった。そこで、ケージの構造を改良し、平均殻長8～70mmの小型種苗を用いて養殖試験を行った。その結果、殻長20mmで約730個/m²、殻長30mmで約530個/m²、殻長85mmで約230個/m²、殻長110mmで約150個/m²の養殖が可能となった。

実施機関	水産試験場 八重山支場			連絡先	09808-8-2255		
部会名	水産	専門	養殖	対象	ヒレジャコ	分類	指導

〔背景・ねらい〕

従来のヒレジャコ養殖試験結果では、中型サイズ(平均殻長70～100mm)の貝を仕切型ケージで養殖すると高い生残率(92.5～100%)となった。しかし、小型サイズ(平均殻長8～50mm)では生残率が低く、小型種苗の養殖は困難であった。また、中型サイズの養殖密度も20個体/m²と低かった。そこで、平均殻長8～70mmの小型種苗の養殖技術を確立するためにケージの目合い、仕切り方法、材質及び収容密度に検討を加えた。

〔成果の内容・特徴〕

①ケージは骨組みをドブ潰けアングルで製作した。底面部の水平面を確保するためにワイヤーメッシュで補強した。ケージ内はネトロンネットの内張りを施した。個室で仕切らず、主にネトロンネットを底面に敷き、目合い内に稚貝が入るようにした(図1)。

②殻長8mmサイズは613～1,000個/m²で97～443日間、殻長20～35mmサイズは135～600個/m²で34～106日間、殻長50～70mmサイズは60～300個/m²で107～339日間試験を行った(表1)。

③各殻長サイズでの好事例の養殖密度は、概ね20mmで730個/m²、30mmで530個/m²、85mmで230個/m²、110mmで150個/m²となった。この時の生残率も90.9～99.1%と高かった(表1)。

〔成果の活用面・留意点〕

①小型種苗(殻長8mm)からの養殖が可能となった。

②ケージの目詰り掃除、貝の剥離・密度調整の管理は好結果を得るためには1～2ヶ月毎に行うことが望ましい。

③ケージの海底への固定は、砂地に鉄筋を打ち込み、それとケージの足部分を固定して行うことが必要である。

④この試験は川平保護水面の礁池内で行った。試験場所は特に波浪の影響の少ない特殊な場所ではない。そのため、この技術は他の地域においても十分に利用できる技術である。

⑤貝の成長に合わせてケージに張る目合い(殻長20mmで9mm目)を大きくする方が望ましい。

⑥この技術はヒレジャコ以外の大型シャコガイの養殖にも応用が可能である。

⑦この試験は、川平保護水面の礁池内で行ったため、水温が他の海域より高かったことが予測される。そのため、他の海域ではこの試験より成長が遅れる可能性がある。

⑧養殖ヒレジャコ(漁業調整規格外の殻長サイズ)は販売事例が少ない。今後、生産物が大量に市場に流通した上で、この養殖の経済性について評価しなければならない。

【具体的データ】

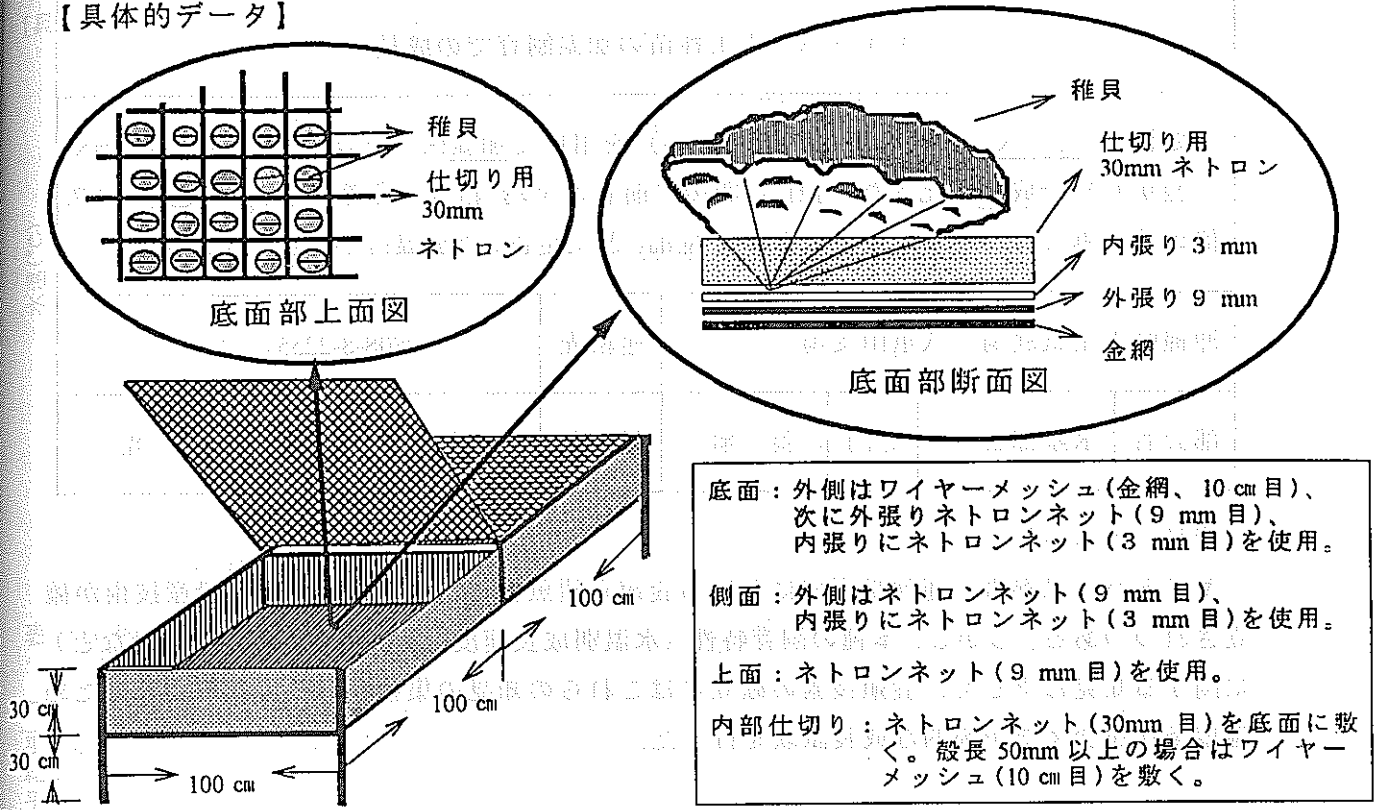


図1 養殖ケージの模式図

表1 ヒレジャコのケージ養殖試験結果

No.	仕切り材質 (仕切り数)	開始 個体数 (個)	平均 殻長 (mm)	試験 期間 (日)	開始～終了 年月日	生残個体数 及び密度 (個)(個/m ²)	生残 率 (%)	生残個体 平均殻長 (mm)	成長量 (mm)
1	ネット 30mm	800	8.3	108	97.4.17 ~ 97.7.24	727	90.9	20.4	12.1
2	接着砂	1,000	9.1	239	96.1.30 ~ 96.9.26	523	52.3	49.4	40.3
3	ネット 30mm	544	18.8	106	98.2.17 ~ 98.6.3	539	99.1	29.9	11.1
4	ネット 30mm	600	26.1	34	98.6.18 ~ 98.7.22	530	88.3	30.8	4.7
5	ワイヤーマッシュ(100)	162	67.9	339	95.4.10 ~ 96.3.14	150	92.6	114.1	46.2
6	塩ビ角バ 17° (25)	250	66.8	107	97.4.18 ~ 97.7.24	230	92.0	87.6	20.8

【その他】

研究課題名：貝類の増養殖に関する試験研究
 予算区分：県単
 研究期間：平成10年度（平成7年～10年）
 研究担当者：玉城 信、呉屋秀夫
 発表論文等：平成7年度沖縄県水産試験場事業報告書、1997
 平成8年度沖縄県水産試験場事業報告書、1998
 平成9年度沖縄県水産試験場事業報告書（予定）